

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Keola Souknilanh
出身地：ラオス・ボンサリー
所属：アジア経済研究所開発研究センター
日本滞在：1991年10月～

思いやりから学んだ「努力賞」の意味

ケオラ・スックニラン

滞在一五年にもなると日本で見聞きすることの殆どは、いわゆる想定内のものばかりになり、日本人の行動が新鮮に思えたり、感動するようなことも少なくなった。しかしこの間、やはり日本は奥の深い国だと再び気づかされる、感動的な場面に久々に出会った。

一二年ぶりに東京に引越し、来日した当初本を買うならとインドネシア人の先輩に教えてもらい、よく通った古本の町神保町を散歩したときのこと。本を買った後にお腹が空いたので、自宅へ戻る前の腹ごしらえに、いつものように和式ファーストフードの立ち食いそば屋に入った。平日の夜七時頃だったので、店の中はある程度混んでいた。食器の返却口にトレー、お椀などが重なるように置かれているのが気になりながらも、食券を買い自分の番を待った。ところが、待つてもそばはなかなか出てこない。カウンターの向うの店員を見ると動作が異様に遅く、また、一人しかいないことにも気がついた。口には出さなかったが、お腹が空いていたこともあり、心の中では「何をやっているんだ」といらいらしてしまった。自分の後ろに並んで待っている数人に「遅いなあ」と確認をするように何度も振り返った。返却口に置く場所がな

くなったため、食器は立ち食いする台にまで並べられた。いらいらがピークに達し、食べずに出ようかと思つた矢先、自分の常識では考えられない光景を見た。

食べ終わった一人のサラリーマン風の中年男性が食器を片付け始めた。しかも、返却口に置かれているものだけではない。食べる台に置いてあるもの全部であった。それに気づいた店員は、ひたすら「すみません」と「ありがとうございます」を繰り返していた。職人技や客は神様という考えを重んじる日本で、そば屋を営業しながらそばを出したり、片付けたりすることがろくにできないことに、他の客も当然いららしているだろうと思つていたので、一瞬頭の中が真っ白になった。

待たされた怒りはすっかり消え、帰り道では、自分の常識が通用しなかったことで頭の中がいっぱいになった。もちろん、当事者に聞く以外に、真実を見つけ出す方法はない。そこで、事実だけでもはっきりさせてみることにした。これは来日以来、不可解なことに会ったたびに、試みてきたことでもあった。中年と思える店員は動きが遅いながらも、手が震えるほど調理、食器洗いを速くしようと努力していたことは確かであった。彼は注文された料理の調理は

遅かったが、客が嫌な思いをするようなことは何もしていなかった。ただ、店の規模から通常二人以上いるような店員が、その時には一人しかいなかっただけだ。

そのため、あのサラリーマン風の中年男性があのような行為に至った経緯を、いつものように自分なりに考えてみた。店員を怒るのではなく、逆に同情したのは、作業が遅いことよりも、彼の一生懸命さを評価したのではないかと思つた。思えば、ラオスで数年過ごした大学時代の日本人の友人から「ラオスには『努力賞』という考え方がないから、失敗を恐れ、チャレンジをしようとする人が少ないのだ」と言われたことがあった。よく考えれば、他国では恐らくあまりないが、成功した人とは言い難い歴史上の人物をも、日本のテレビでは偉人のように紹介することがあるように思う。

久々に感動したことに会えたので、同情できなかった自分がその出来事を無駄にしないためにも、他の店員が急に休んだのではないか、または、店員の体調が悪かったのかもしれないと考えることで、あのときの店員を思いやる気持ちを持つべきではなかったか、と強く自分に言い聞かせた。

(けおら すつくにらん/アジア経済研究所開発研究センター/原文日本語)